



「古典」の言葉にふれよう

『古典』を楽しむ』で、「古典」といわれる昔の物語のいくつかを読んできました。『竹取物語』や『平家物語』では、少しでもですが、昔の言葉をそのままに読みました。昔の物語を昔の言葉で読んで、あなたはどのように感じましたか。

『源氏物語』

『源氏物語』は、紫式部という女性が千年ほど前に書いた物語です。この物語は、日本の古い物語の中でも特にすぐれた作品として、後の日本文化にとっても大きなえいきょうをあたえたといわれています。

『源氏物語』の中には、『竹取物語』のことが、「物語のいづれははじめの親」と書かれています。このことで、『竹取物語』が作られてから百年ほどたったと思われるこのころには、もう、多くの人に親しまれていたことがわかります。

『源氏物語』は、次のように始まっています。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなきにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

どの帝の御代であつたのだろうか、女御や更衣が大勢帝にお仕えしていらつしやった中に、それほど高貴な家柄ではないかたて、格別に帝に大事にされていらつしやるかたがいた。

『伊曽保物語』

はととありのこと (全文)

ある川のほとりに、あり、遊ぶことありけり。にはかに水かさ増さ
りきて、かのありをさそひ流る。うきぬしづみぬするところに、はと、
こずゑよりこれを見て、「あはれなるありさまかな。」と、こずゑをち
と食ひ切つて、川の中に落としければ、あり、これに乗つてなぎさに
上がりぬ。かかりけるところに、ある人、さをの先にとりもちをつけ

てかのはとをささむとす。あり、心に思ふやう、「ただ今の恩を送らむものを。」と思ひ、かの人の足にしっかりと食ひつけければ、おびえあがつて、さをかしこに投げすてけり。そのものの色やしる。しかるに、はと、これをさとりて、いづくともなく飛び去りぬ。

そのごとく、人の恩を受けたらむ者は、「いかさまにもそのむくひをせばや。」と思ふころざしをもつべし。

ある川のほとりて、ありが遊んでいました。すると、急に、水かさが増えてきて、そのありをまきこんで流れました。ありがういたりしずんだりしていると、はとが木の枝からこの様子を見て、「気の毒だなあ。」と、木の枝を少し食いちぎって、川の中に落としたので、ありはそれに乗って岸に上がることができました。すると、ある人がさおの先に鳥もちを付けて、はとをとろうとしました。ありは心の中で、「たった今自分が受けた恩を返そう。」と思って、その人の足にしっかりと食いついたので、その人はびっくりして、さおをその場に投げすてました。その人は、ありに食いつかれたわけがわからなかったでしょう。しかし、はとはそれがわかって、どこへともなく飛び去りました。

このように、人の恩を受けたような者は、「どのようにしてもその恩返しをしたい。」という気持ちをもちたいものです。

今、わたしたちが知っている「ありときりぎりす」の話が「ありとせみのこと」となっているなど、少し内容が変わっているものもありますが、『伊曾保物語』には、この他にも、「ライオンとねずみ」などの話がおさめられています。

昔の言葉をそのまま読むのは大変です。しかし、今の言葉と比べたり、言葉のリズムやひびきを感じたりすることで、みなさんの言葉の世界は広がっていくでしょう。

